

# ひかりの素足

宮沢賢治

青空文庫



## 一、山小屋

鳥の声があんまりやかましいので一郎は眼をさしました。もうすっかり夜があけてゐたのです。

小屋の隅から三本の青い日光の棒が斜めにまつすぐに兄弟の頭の上を越して向ふの萱かやの壁の山刀やはむばきを照らしてゐました。土間のまん中では櫓ほだが赤く燃えてゐました。日光の棒もそのけむりのために青く見え、またそのけむりはいろいろなかたちになつてついついとその光の棒の中を通つて行くのでした。

「ほう、すっかり夜あ明げだ。」一郎はひとりごとを云いひながら

弟のならを榎夫の方に向き直りました。榎夫の顔はりんごのやうに赤く口をすこしあいてまだすやすやねむ睡つて居ました。白い歯が少しばかり見えてゐましたので一郎はいきなり指でカチンとその歯をはじきました。

榎夫は目をつぶつたまゝ、一寸ちよつと顔をしかめましたがまたすうすう息をしてねむりました。

「起ぎろ、榎夫、夜あ明けだ、起ぎろ。」一郎は云ひながら榎夫の頭をぐらぐらゆすぶりました。

榎夫はいやさうに顔をしかめて何かぶつぶつ云つてゐましたがたうとううすく眼を開きました。そしていかにもびっくりしたらしく

「ほ、山さ来てらたもな。」とつぶやきました。

「昨夜、今朝方ゆべな けさかだだたがな、火あ消けでらたな、覚おべだが。」

一郎が云ひました。

「知らない。」

「寒くてさ。お父さん起きて又燃やしたやうだっけあ。」

榎夫は返事しないで何かぼんやりほかのことを考えてゐるやうでした。

「お父さん外そとで稼かせいでら。さ、起きべ。」

「うん。」

そこで二人は一いっしょ所しよにくるまつて寝た小さな一枚の布団から起き出しました。そして火のそばに行きました。榎夫はけむさうに

めをこすり一郎はじつと火を見てゐたのです。

外では谷川がごうごうと流れ鳥がツンツン鳴きました。

その時にはかにまぶしい黄金きんの日光が一郎の足もとに流れて来ました。

顔をあげて見ますと入口がパツとあいて向ふの山の雪がつんと白くかゞやきお父さんがまつ黒に見えながら入って来たのでした。

「起きだのが。昨夜ゆべな寒くないがったが。」

「いゝえ。」

「火あ消けでらたもな。おれあ二度起きで燃もやした。さあ、口漱すすげ、飯までげでら、櫓夫。」

「うん。」

「家ど山どどつちあ好い。」

「山の方あい、いんとも学校さ行がれないもな。」

するとお父さんが鍋を少しあげながら笑ひました。一郎は立ちあがって外に出ました。櫓夫もつづいて出ました。

何といふきれいでせう。空がまるで青びかりでツルツルしてその光はツンツンと二人の眼にしみ込みまた太陽を見ますとそれは大きな空の宝石のやうに橙や緑やかゞやきの粉をちらしまぶしさに眼をつむりますと今度はその蒼黒いくらやみの中に青あをと光つて見えるのです、あたらしく眼をひらいては前の青ぞらに桔梗いろや黄金やたくさんの太陽のかげぼふしがくらくらとゆれ

てかゝつてゐます。

一郎はかけひの水を手にうけました。かけひからはつららが太い柱になつて下までどゞき、水はすきとほつて日にかゞやきまたゆげをたてていかにも暖かさうに見えるのでした。がまことはつめたく寒いのでした。一郎はすばやく口をそゞぎそれから顔もあらひました。

それからあんまり手がつめたいのでお日さまの方へ延ばしました。それでも暖まりませんでしたからのどにあてました。

その時なつを櫓夫も一郎のとほりまねをしてやつてゐましたが、たうとうつめたくてやめてしまひました。まったく櫓夫の手は霜やけで赤くふくれてゐました。一郎はいきなり走つて行つて



「冷<sup>つめ</sup>だあが。」と云ひながらそのぬれた小さな赤い手を両手で包んで暖めてやりました。

さうして二人は又小屋の中にはひりました。

お父さんは火を見ながらじつと何か考へ、鍋はことこと鳴つてゐました。

二人も座りました。

日はもうよほど高く三本の青い日光の棒もだいぶ急になりました。

向ふの山の雪は青ぞらにくつきりと浮きあがり見てゐますと何だかこゝろが遠くの方へ行くやうでした。

にはかにそのいたゞきにパツとけむりか霧のやうな白いぼんや

りしたものがあらはれました。

それからしばらくたつてフィーとするどい笛のやうな声が聞えて来ました。

すると櫓夫がしばらく口をゆがめて変な顔をしてゐましたがたうとうどうしたわけかしくしく泣きはじめました。一郎も変な顔をして櫓夫を見ました。

お父さんがそこで

「何した、家さ行くだぐなつたのが、何した。」とたづねました  
が櫓夫は両手を顔にあてて返事もしないで却かへつてひどく泣くばかりでした。

「何した、櫓夫、腹痛いが。」一郎もたづねましたがやつぱり泣

くばかりでした。

お父さんは立つて櫓夫の額に手をあてて見てそれからしつかり頭を押へました。

するとだんだん泣きやんでつひにはたゞしくしく泣きじやくるだけになりました。

「何<sup>な</sup>して泣いだ。家さ行くだいなったべあな。」お父さんが云ひました。

「うんにや。」櫓夫は泣きじやくりながら頭をふりました。

「どごが痛くてが。」

「うんにや。」

「そだらなして泣いだりや、男などあ泣がないだな。」

「怖おつかない。」まだ泣きながらやつと答へるのでした。

「なして怖つかない。お父さんも居るし兄あなも居るし昼まで明り  
くて何なつても怖つかないごとあ無いぢやい。」

「うんう、怖つかない。」

「何あ怖つかない。」

「風の又三郎あ云つたか。」

「何て云つた。風の又三郎など、怖つかなくない。何て云つた。」

「お父さんおりやさ新らしきもの着せるつて云つたか。」櫓夫は  
また泣きました。一郎もなぜかぞつとしました。けれどもお父さ  
んは笑ひました。

「ああははは、風の又三郎あ、いゝ事ごと云つたな。四月になつたら

新らし着物買ってけらな。一向泣ぐごとあないぢやい。泣ぐな泣ぐな。」

「泣ぐな。」一郎も横からのぞき込んでなぐさめました。

「もつと云ったか。」櫛夫はまるで眼をこすつてまっかにして云ひました。

「何て云った。」

「それからお母さん、おりやのごと湯さ入れで洗ふて云ったか。」

「ああはは、そいづあ嘘ぞ。櫛夫などあいつつも一人して湯さ入るもな。風の又三郎などあ偽こぎさ。泣ぐな、泣ぐな。」

お父さんは何だか顔色を青くしてそれに無理に笑つてゐるやうでした。一郎もなぜか胸がつまって笑へませんでした。櫛夫はま

だ泣きやみませんでした。

「さあお飯食<sup>ま</sup>べし泣ぐな。」

櫓夫は眼をこすりながら変に赤く小さくなった眼で一郎を見ながら又言ひました。

「それがらみんなしておりやのごと送って行くて云ったか。」

「みんなして汝<sup>うな</sup>のごと送てぐど。そいづあなあ、うな立派になつてどごさが行ぐ時あみんなして送つてぐづごとき。みんないゝごとばがりだ。泣ぐな。な、泣ぐな。春になつたら盛岡祭見さ連<sup>つれ</sup>でぐはんで泣ぐな。な。」

一郎はまっ青になつてだまつて日光に照らされたたき火を見てゐましたが、この時やつと云ひました。

「なあに風の又三郎など、怖おつかなぐない。いつつも何だりかだりつて人だますぢやい。」

櫛夫もやうやく泣きじやくるだけになりました。けむりの中で泣いて眼をこすつたもんですから眼のまはりが黒くなつてちよつと小さな狸たぬきのやうに見えました。

お父さんはなんだか少し泣くやうに笑つて

「さあもう一ひとがへり面洗つらないやない。」と云ひながら立ちあがり  
ました。

## 二、峠

ひるすぎになつて谷川の音もだいぶかはりました。何だかあたかくそしてどこかおだやかに聞えるのでした。

お父さんは小屋の入口で馬を引いて炭をおろしに来た人と話してゐました。ずるぶん永いこと話してゐました。それからその人は炭俵を馬につけはじめました。二人は入口に出て見ました。

馬はもりもりかひばをたべてそのたてがみは茶色でばさばさしその眼は大きくて眼の中にはさまざまのをかしの器械が見えて大へんに気の毒に思はれました。

お父さんが二人に言ひました。

「そいであうなだ、この人さ随ついで家さ戻れ。この人あな櫛はな鼻なまで行がはんで。今度の土曜日に天気あ好がったら又おれあ迎いに



行がはんでない。」

あしたは月曜日ですから二人とも学校へ出るために家へ帰らなければならぬのでした。

「そだら行がんです。」一郎が云ひました。

「うん、それがら家さ戻つたらお母さんつかさ、ついでの人さたのんで大きな方の鋸のこぎりをよごして呉けろつて云へやいな、いゝが。忘れなよ。家まで丁度一時半かゞらはんでゆつくり行つても三時間半にあ戻れる。のどあ乾いでも雪たべなやい。」

「うん。」櫓夫ならが答へました。櫓夫はもうすっかり機嫌きげんを直してピョンピョン跳んだりしてゐました。

馬をひいた人は炭俵をすっかり馬につけてつなを馬のせなかで

結んでから

「さ、そいでい、行くまちや。わらし達あ先に立つたら好がべがな。」と二人のお父さんにたづねました。

「なあに随ついでで行くごたんす。どうが願あ申さんすぢや。」お父さんは笑っておじぎをしました。

「さ、そいであ、まんつ、」その人は牽ひきづなを持つてあるき出し鈴はツアリンツアリンと鳴り馬は首を垂れてゆつくりあるきました。

一郎は櫓夫をさきに立ててそのあとに跡ついて行きました。みちがよくかたまつてじつさい気持ちがよく、空はまっ青にはれて、却かへつて少しこはいくらゐでした。

「房下がってるぢやい。」にはかに櫓夫が叫びました。一郎はうしろからよく聞えなかつたので「何や。」とたづねました。

「あの木さ房下がってるぢやい。」櫓夫が又云ひました。見るとすぐ崖がけの下から一本の木が立ってゐてその枝には茶いろの実がいっぱいに房になつて下つて居をりました。一郎はしばらくそれを見ました。それから少し馬におくれたので急いで追ひつきました。馬を引いた人はこの時ちよつとうしろをふりかへつてこつちをすかすやうにして見ましたがまた黙つてあるきだしました。

みちの雪はかたまつてはゐましたがでこぼこでしたから馬はたびたびつまづくやうにしました。櫓夫もあたりを見てあるいてゐましたのでやはりたびたびつまづきさうにしました。

「下見で歩げ。」と一郎がたびたび云ったのでした。

みちはいつか谷川からはなれて大きな象のやうな形の丘の中腹をまはりはじめました。栗くりの木が何本か立つて枯れた乾いた葉をいっばい着け、鳥がちよんちよんと鳴いてうしろの方へ飛んで行きました。そして日の光がなんだか少しうすくなり雪がいままでより暗くそして却つて強く光つて来しました。

そのとき向ふから一列の馬が鈴をチリンチリンと鳴らしてやつて参りました。

みちがひと一むらの赤い実をつけたまゆみの木のそばまで来たとき両方の人たちは行きあひました。兄弟の先に立った馬は一寸ちよつとみちをよけて雪の中に立ちました。兄弟も膝ひざまで雪にはひつてみち

をよけました。

「早いな。」

「早がつたな。」 挨拶あいさつをしながら向ふの人たちや馬は通り過ぎ  
て行きました。

ところが一ばんおしまひの人は挨拶をしたなり立ちどまってしまひました。馬はひとりで少し歩いて行ってからうしろから「どう。」と云はれたのでとまりました。兄弟は雪の中からみちにあらがり二人とならんで立つてゐた馬もみちにあらがりました。ところが馬を引いた人たちはいろいろ話をはじめました。

兄弟はしばらくは、立つて自分たちの方の馬の歩き出すのを待つてゐましたがあまり待ち遠しかったのでたうとう少しづつある

き出しました。あとはもう峠を一つ越えればすぐ家でしたし、一里もないのでしたからそれに天気も少しは曇ったつてみちはまっすぐにつゞいてゐるのでしたから何でもないと一郎も思ひました。馬をひいた人は兄弟が先に歩いて行くのを一寸ちよつとよこめで見てゐましたがすぐあとから追ひつくつもりらしくだまつて話をつゞけました。

櫓夫はもう早くうちへ帰りたいらしくどんどん歩き出し一郎もたびたびうしろをふりかへつて見ましたが馬が雪の中で茶いろの首を垂れ二人の人が話し合つて白い大きな手甲がちらつと見えた。りするだけでしたからやつぱり歩いて行きました。

みちはだんだんのぼりになりつつひにはすっかり坂になりました。

ので櫓夫はたびたび膝ひざに手をつっぱって「うんうん」とふぎけるやうにしながらのぼりました。一郎もそのうしろからはあはあ息をついて

「よう、坂道、よう、山道」なんて云ひながら進んで行きました。けれどもたうとう櫓夫は、つかれてくるりところちを向いて立ちどまりましたので、一郎はいきなりひどくぶつつかりました。

「こは疲こいが。」一郎もはあはあしながら云ひました。来た方を見ると路みちは一すぢずうつと細くついて人も馬ももう丘のかげになつて見えませんでした。いちめんまっ白な雪、（それは大へんくらく沈んで見えました。空がすっかり白い雲でふさがり太陽も大きな銀の盤のやうにくもつて光つてゐたのです）がなだらかに起伏し

そのところどころに茶いろの栗くりや柏かしはの木が三本四本づつちらばつてゐるだけじつにしいんとして何ともいへないさびしいのでした。けれども櫓夫はその丘の自分たちの頭の上からまっすぐに向ふへかけおりて行く一疋ひきの鷹たかを見たとき高く叫びました。

「しっ、鳥だ。しゅう。」

一郎はだまつてゐました。けれどもしばらく考えてから云ひました。

「早く峠越えるべ。雪降つて来るぢよ。」

ところが丁度そのときです。まっしろに光つてゐる白いそらに暗くゆるやかにつらなつてゐた峠の頂の方が少しぼんやり見えて来ました。そしてまもなく小さな小さな乾いた雪のこなが少しば



かりちらつちらつと二人の上から落ちて参りました。

「さあ櫓夫、早ぐのぼれ、雪降つて来た。上さ行けば平らだはんで。」一郎が心配さうに云ひました。

櫓夫は兄の少し変わった声を聞いてにはかにあわてました。そしてまるでせかせかとのぼりました。

「あんまり急ぐな。大丈夫だはんで、なあにあど一里も無いも。」一郎も息をはづませながら云ひました。けれどもじっさい二人とも急がずに居られなかつたのです。めの前もくらむやうに急ぎました。あんまり急ぎすぎたのでそれはながくつゞきませんでした。雪がまつたくひどくなつて来た方も行く方もまるで見えぬ二人のからだもまつ白になりました。そして櫓夫が泣いていきなり一郎ならを

にしがみつきました。

「戻るが、櫓夫。戻るが。」一郎も困つてさう云ひながら来た下の方を一寸見ましたがとてももう戻ろうとは思はれませんでした。ちよつとそれは来た方がまるで灰いろで穴のやうにくらく見えたのです。それにくらべては峠の方は白く明るくおまけに坂の頂上だつてもうぢきでした。そこまでさへ行けばあとはもう十町もずうつと丘の上で平らでしたし来るときは山鳥も何べんも飛び立ちくわん灌ぼく木の赤や黄いろの実もあつたのです。

「さあもう一あしだ。歩あべ。上まで行けば雪も降つてないしみぢも平らになる。歩おべ、怖おつかなぐないはんて歩べ。あどがらあの人も馬ひで来るしそれ、泣がないで、今度あゆつくり歩べ。」一

郎は櫓夫の顔をのぞき込んで云ひました。櫓夫は涙をふいてわらひました。櫓夫の頬ほほに雪のかけらが白くついてすぐ溶けてなくなつたのを一郎はなんだか胸がせまるやうに思ひました。一郎が今度は先に立つてのぼりました。みちももうそんなにけはしくはありませんでしたし雪もすこし薄くなつたやうでした。それでも二人の雪ゆきぐつ沓は早くも一寸も埋まりました。

だんだんいたゞきに近くなりますと雪をかぶつた黒いゴリゴリの岩がたびたびみちの両がはに出て来ました。

二人はだまつてなるべく落ち着くやうにして一足づつのぼりました。一郎はばたばた毛布をうごかしてからだから雪をはらつたりしました。

そしていゝことはもうそこが峠のいたゞきでした。

「来た来た。さあ、あどあ平らだぞ、櫓夫。」

一郎はふりかへって見ました。櫓夫は顔をまっかにしてはあはあしながらやつと安心したやうにわらひました。けれども二人の間にもこまかな雪がいつぱいに降つてゐました。

「馬もきつと坂半分ぐらゐ登つたな。叫んで見べが。」

「うん。」

「いゝが、一二三、ほおお。」

声がしんと空へ消えてしまひました。返事もなくこだまも来ずかへつてそらが暗くなつて雪がどんどん舞ひおるばかりです。

「さあ、歩<sup>あ</sup>べ。あと三十分で下りるにい。」

一郎はまたあるきだしました。

にはかに空のほうでヒイウと鳴って風が来ました。雪はまるで粉のやうにけむりのやうに舞ひあがりくるしくて息もつかれずきもののすきまからはひやひやとからだにはひりました。兄弟は両手を顔にあてて立ちどまってゐましたがやつと風がすぎたので又あるき出さうとするときこんどは前より一そうひどく風がやつて来ました。その音はおそろしい笛のやう、二人のからだも曲げられ足もとをさらさら雪の横にながれるのさへわかりました。

たうげのいたゞきはまったくさつき考へたのはちがつてゐたのです。櫓夫はあんまりこゝろぼそくなつて一郎にすがらうとしました。またうしろをふりかへつても見ました。けれども一郎は

風がやむとすぐ歩き出しましたし、うしろはまるで暗く見えましたから櫓夫はほんたうに声を立てないで泣くばかりよちよち兄に追ひ付いて進んだのです。

雪がもう沓くつのかゝと一杯でした。ところどころには吹き溜りだまが出来てやつとあるけるぐらゐでした。それでも一郎はずんずん進みました。櫓夫もそのあしあとを一生けん命ついで行きました。一郎はたびたびうしろをふりかへってはゐましたがそれでも櫓夫はおくれがちでした。風がひゅうと鳴って雪がぱつとつめたいけむりをあげますと、一郎は少し立ちどまるやうにし櫓夫は小刻みに走って兄に追ひすがりました。

けれどもまだその峯みちを半分も来ては居りませんでした。吹

きだまりがひどく大きくなってたびたび二人はつまづきました。

一郎は一つの吹きだまりを越えるとき、思ったより雪が深く、たうとう足をさらはれて倒れました。一郎はからだや手やすっかり雪になって軋きしるやうに笑って起きあがりましたが、櫓夫はうしろに立ってそれを見てこはさに泣きました。

「大丈夫だ。櫓夫、泣くな。」一郎は云ひながら又あるきました。けれどもこんどは櫓夫がころびました。そして深く雪の中に手を入れてしまつて急に起きあがりもできずおじぎのときのやうに頭をさげてそのまゝ泣いてゐたのです。一郎はすぐ走り戻つて起きしました。そしてその手の雪をはらつてやりそれから、

「さあも少しだ。歩けるが。」とたづねました。

「うん」と櫓夫は云つてゐましたがその眼はなみだで一杯になりじつと向ふの方を見、口はゆがんで居りました。

雪がどんどん落ちて来ます。それに風が一そうはげしくなりました。二人は又走り出しましたけれどももうつまづくばかり一郎がころび櫓夫がころびそれにいまはもう二人ともみちをあるいてるのかどうか前無かつた黒い大きな岩がいきなり横の方に見えたりしました。

風がまたやって来ました。雪は塵ちりのやう砂のやうけむりのやう櫓夫はひどくせき込んでしまひました。

そこはもうみちではなかつたのです。二人は大きな黒い岩につきあたりました。



一郎はふりかへって見ました。二人の通つて来たあとはまるで雪の中にほりのやうについてゐました。

「路まちがった。戻らないばわがない。」

一郎は云つていきなり櫓夫の手をとつて走り出さうとしましたがもうたゞの一足ですぐ雪の中に倒れてしまひました。

櫓夫はひどく泣きだしました。

「泣ぐな。雪はれるうち此処ここに居るべし泣ぐな。」一郎はしっかりと櫓夫を抱いて岩の下に立つて云ひました。

風がもうまるできちがひのやうに吹いて来ました。いきもつけず二人はどんどん雪をかぶりました。

「わがない。わがない。」櫓夫が泣いて云ひました。その声もま

るでちぎるやうに風が持つて行つてしまひました。一郎は毛布をひろげてマントのまゝなほらを櫓夫を抱きしめました。

一郎はこのときはもうほんたうに二人とも雪と風で死んでしまふのだと考えてしまひました。いろいろなことがまるでまはり燈ど籠ろうのやうに見えて来ました。

正月に二人は本家ほんけに呼ばれて行つてみんながみかんをたべたとき櫓夫がすばやく一つたべてしまつても一つを取つたので一郎はいけないといふやうにひどく目しかで叱つたのでした、そのときの櫓夫の霜やけの小さな赤い手などがはつきり一郎に見えて来ました。いきが苦しくてまるでえらえらする毒をのんでゐるやうでした。一郎はいつか雪の中に座つてしまつてゐました。そして一そう強く櫓夫を抱きしめました。

## 三、うすあかりの国

けれどもけれどもそんなことはまるでまるで夢のやうでした。いつかつめたい針のやうな雪のこなもなんだかなまぬるくなり檀夫もそばに居なくなつて一郎はたゞひとりぼんやりくらい藪やぶのやうなところをあるいて居りました。

そこは黄色にぼやけて夜だか昼だか夕方かもわからずよもぎのやうなものがいっぱいに生えあちこちには黒いやぶらしいものがまるでいきもののやうにいきをしてゐるやうに思はれました。

一郎は自分のからだを見ました。そんなことが前からあつたの

か、いつかからだには鼠ねずみいろのきれが一枚まきついてあるばかりおどろいて足を見ますと足ははだしになってゐて今までもよほど歩いて来たらしく深い傷がついて血がだらだら流れて居りました。それに胸や腹がひどく疲れて今にもからだが二つに折れさうに思はれました。一郎にはかにはかになくなって大声に泣きました。

けれどもそこはこの国だったのでせう。ひっそりとして返事もなく空さへもなんだかがらんとして見れば見るほど変なおそろしい気がするのです。それにはかに足が灼やくやうに傷いたんで来ました。

「榎夫は。」ふつと一郎は思ひ出しました。

「榎夫お。」一郎はくらい黄色なそらに向つて泣きながら叫びま

した。

しいんとして何の返事ありませんでした。一郎はたまらなくなつてもう足の痛いのも忘れてはしり出しました。すると俄にはかに風が起つて一郎のからだについてゐた布はまつすぐにうしろの方へなびき、一郎はその自分の泣きながらはだしで走つて行つてぼろぼろの布が風でうしろへなびいてゐる景色を頭の中に考へて一そう恐ろしくかなしくてたまらなくなりました。

「櫓夫お。」一郎は又叫びました。

「兄あな。」かすかなかすかな声が遠くの遠くから聞えました。一郎はそつちへかけ出しました。そして泣きながら何べんも「櫓夫お、櫓夫お。」と叫びました。返事はかすかに聞えたり又返事し

たのかどうか聞えなかつたりしました。

一郎の足はまるでまっ赤になつてしまひました。そしてもう痛いかどうかもわからず血は気味悪く青く光つたのです。

一郎ははしつてはしつて走りました。

そして向ふに一人の子供が丁度風で消えようとする蠟燭ろうそくの火のやうに光つたり又消えたりぺかぺかしてゐるのを見ました。

それが顔に両手をあてて泣いてゐるなを榎夫でした。一郎はそばへかけよりました。そしてにはかに足がぐらぐらして倒れました。

それから力いっぱい起きあがつて榎夫を抱かうとしました。榎夫は消えたりともつたりしきりにしてゐましたがだんだんそれが早くなりたうとうその変りもわからないやうになつて一郎はしつか

りと櫓夫を抱いてみました。

「櫓夫、僕たちどこへ来たらうね。」一郎はまるで夢の中のやうに泣いて櫓夫の頭をなでてやりながら云ひました。その声も自分が云つてゐるのか誰かの声を夢で聞いてゐるのかわからないやうでした。

「死んだんだ。」と櫓夫は云つてまたはげしく泣きました。

一郎は櫓夫の足を見ました。やっぱりはだしでひどく傷がついて居りました。

「泣かなくつてもいゝんだよ。」一郎は云ひながらあたりを見ました。ずうつと向ふにぼんやりした白びかりが見えるばかりしいんとしてなんにも聞えませんでした。

「あすこの明るいところまで行って見よう。きっとうちがあるから、お前あるけるかい。」

一郎が云ひました。

「うん。おつかさんがそこに居るだろうか。」

「居るとも。きつと居る。行かう。」

一郎はさきになつてあるきました。そらが黄いろでぼんやりくらくていまにもそこから長い手が出て来さうでした。

足がたまらなく痛みました。

「早くあすこまで行かう。あすこまでさへ行けばいゝんだから。」

一郎は自分の足があんまり痛くてバリバリ白く燃えてるやうなのをこらへて云ひました。けれども櫓夫はもうとてもたまらないら



しく泣いて地面に倒れてしまひました。

「さあ、兄さんにしつかりつかまるんだよ。走つて行くから。」  
一郎は齒を喰ひしぼつて痛みをこらへながら櫓夫を肩にかけました。そして向ふのぼんやりした白光をめぐけてまるでからだもちぎれるばかり痛いのを堪へて走りまゐりました。それでももうとてもたまらなくなつて何べんも倒れました。倒れてもまた一生懸命に起きあがりました。

ふと振りかへつて見ますと来た方はいつかぼんやり灰色の霧のやうなものにかくれてその向ふを何かうす赤いやうなものがひらひらしながら一目散に走つて行くらしいのです。

一郎はあんまりの怖さに息もつまるやうにおもひました。それ

でもこらへてむりに立ちあがってまた櫓夫を肩にかけました。櫓夫はぐったりとして気を失つてゐるやうでした。一郎は泣きながらその耳もとで、

「櫓夫、しっかりおし、櫓夫、兄さんがわからないかい。櫓夫。」  
と一生けん命呼びました。

櫓夫はかすかにかすかに眼をひらくやうにはしましたけれどもその眼には黒い色も見えなかつたのです。一郎はもうあらんかぎりの力を出してそこら中いちめんちらちら白い火になつて燃えるやうに思ひながら櫓夫を肩にしてさつきめざした方へ走りました。足がうごいてゐるかどうかもわからずからだは何か重い巖いはに砕かれて青びかりの粉になつてちらけるやう何べんも何べ

んも倒れては又櫓夫を抱き起して泣きながらしつかりとかゝへ夢のやうに又走り出したのでした。それでもいつか一郎ははじめにめぎしたうすあかるい処ところに来ては居ました。けれどもそこは決していゝ処ではありませんでした。却かへつて一郎はからだ中凍ったやうに立ちすくんでしまひました。すぐ眼の前は谷のやうになつた窪地くぼちでしたがその中を左から右の方へ何ともいへずいたましいなりをした子供らがぞろぞろ追はれて行くのでした。わづかばかりの灰いろのきれをからだにつけた子もあれば小さなマントばかりはだかに着た子もありました。瘡やせて青ざめて眼ばかり大きな子、髪あかの赭あかい小さな子、骨の立つた小さな膝ひざを曲げるやうにして走つて行く子、みんなからだを前にまげておどおど何かを恐れ横を見

るひまもなくたゞふかくふかくため息をついたり声を立てないで泣いたり、ぞろぞろ追はれるやうに走って行くのでした。みんな一郎のやうに足が傷きざついてゐたのです。そして本たうに恐ろしいことはその子供らの顔を顔のまっ赤な大きな人のかたちのものが灰いろの棘とげのぎざぎざ生えた鎧よろひを着て、髪などはまるで火が燃えてゐるやう、たゞれたやうな赤い眼をして太い鞭むちを振りながら歩いて行くのでした。その足が地面にあたるときは地面はがりがり鳴りました。一郎はもう恐ろしさに声も出ませんでした。

櫓夫ぐらゐの髪のちゞれた子が列の中に居ましたがあんまり足が痛むと見えてたうとうよろよろつまづきました。そして倒れさうになつて思はず泣いて

「痛いよう。おつかさん。」と叫んだやうでした。するとすぐ前を歩いて行つたあの恐ろしいものは立ちどまつてこつちを振り向きました。その子はよろよろして恐ろしさに手をあげながらうしろへ遁にげようとしてしまつたら忽たちまちその恐ろしいものの口がびくつとうごきばつと鞭が鳴つてその子は声もなく倒れてもだえました。あとから来た子供らはそれを見てもたゞふらふらと避けて行くだけ一語も云ふものがありませんでした。倒れた子はしばらくもだえてゐましたがそれでもいつかさっきの足の痛みなどは忘れたやうに又よろよると立ちあがるのでした。

一郎はもう行くにも戻るにも立ちすくんでしまひました。俄にはかに櫓夫が眼を開いて

「お父さん。」と高く叫んで泣き出しました。すると丁度下を通りかかった一人のその恐ろしいものはそのゆがんだ赤い眼をこつちに向けました。一郎は息もつまるやうに思ひました。恐ろしいものはむちをあげて下から叫びました。

「そこらで何をしてるんだ。下りて来い。」

一郎はまるでその赤い眼に吸ひ込まれるやうな気がしてよろよろ二三歩そつちへ行きましたがやつとふみとまってしつかり櫓夫を抱きました。その恐ろしいものは頬ほまをびくびく動かし歯をむき出して咆ほえるやうに叫んで一郎の方に登って来ました。そしていつか一郎と櫓夫とはつかまれて列の中に入つてゐたのです。ことに一郎のかなしかつたことはどうしたのか櫓夫が歩けるやうにな

つてはだしでその痛い地面をふんで一郎の前をよろよろ歩いてゐることでした。一郎はみんなと一緒に追はれてあるきながら何べんも櫓夫の名を低く呼びました。けれども櫓夫はもう一郎のことなどは忘れたやうでした。たゞたびたびおびえるやうにうしろに手をあげながら足の痛さによるめきながら一生けん命歩いてゐるのです。一郎はこの時はじめて自分たちを追つてゐるものは鬼といふものなことで、又櫓夫などに何の悪いことがあつてこんなつらい目にあふのかといふことを考へました。そのとき櫓夫がたうとう一つの赤い稜かどのある石につまづいて倒れました。鬼のむちがその小さなからだを切るやうに落ちました。一郎はぐるぐるしながらその鬼の手にすがりました。

「私を代りに打つて下さい。櫓夫はなんにも悪いことがないので  
す。」

鬼はぎよつとしたやうに一郎を見てそれから口がしばらくぴく  
ぴくしてゐましたが大きな声で斯<sup>か</sup>う云ひました。その齒がギラギ  
ラ光つたのです。

「罪はこんどばかりではないぞ。歩け。」

一郎はせなかがシインとしてまはりがくるくる青く見えました。  
それからからだ中からつめたい汗が湧<sup>わ</sup>きました。

こんなにして兄弟は追はれて行きました。けれどもだんだんな  
れて来たと見えて二人ともなんだか少し楽になつたやうにも思ひ  
ました。ほかの人たちの傷ついた足や倒れるからだを夢のやうに



横の方に見たのです。にはかにあたりがぼんやりくらくらになりました。それから黒くなりました。追はれて行く子供らの青じろい列ばかりその中に浮いて見えました。

だんだん眼が闇やみになれて来た時一郎はその中のひろい野原にたくさんの黒いものがじつと座つてゐるのを見ました。微かすかな青びかりもありました。それらはみなからだ中黒い長い髪の毛で一杯に覆はれてまっ白な手足が少し見えるばかりでした。その中の一つがどういふわけか一ちよつと寸動いたと思ひますと俄にはかにからだもちぎれるやうな叫び声をあげてもだえまはりました。そしてまもなくその声もなくなつて一かけの泥のかたまりのやうになつてころがるのを見ました。そしてだんだん眼がなれて来たときその闇の

中のいきものは刀の刃のやうに鋭い髪の毛でからだを覆はれてゐること一寸でも動けばすぐからだを切ることがわかりました。

その中をしばらくしばらく行つてからまたあたりが少し明るくなりまりました。そして地面はまっ赤でした。前の方の子供らが突然<sup>はげ</sup>烈しく泣いて叫びました。列もとまりました。鞭<sup>むち</sup>の音や鬼の怒り声が雹<sup>ひょう</sup>や雷のやうに聞えて来ました。一郎のすぐ前を櫓夫がよろしてゐるのです。まったく野原のその辺は小さな瑪瑙<sup>めなう</sup>のかけらのやうなものでできてゐて行くものの足を切るのですでした。

鬼は大きな鉄の沓<sup>くつ</sup>をはいてゐました。その歩きたびに瑪瑙はガリガリ砕けたのです。一郎のまはりからも叫び声が沢山起りました。櫓夫も泣きました。

「私たちはどこへ行くんですか。どうしてこんなつらい目にあふんですか。」櫓夫はとなりの子にたづねました。

「あたしは知らない。痛い。痛いなあ。おつかさん。」その子はぐらぐら頭をふって泣き出しました。

「何を云ってるんだ。みんなきさまたちの出かしたこつた。どこへ行くあてもあるもんか。」

うしろで鬼が咆<sup>ほ</sup>えて又鞭をなりました。

野はらの草はだんだん荒くだんだん鋭くなりました。前の方の子供らは何べんも倒れては又力なく起きあがり足もからだも傷つき、叫び声や鞭<sup>むち</sup>の音はもうそれだけでも倒れさうだったので。

櫓夫がいきなり思ひ出したやうに一郎にすがりついて泣きまし

た。

「歩け。」鬼が叫びました。鞭が櫛夫を抱いた一郎の腕をうちましました。一郎の腕はしびれてわからなくなつてただびくびくうごきました。櫛夫がまだすがりついてゐたので鬼が又鞭をあげました。「櫛夫は許して下さい。櫛夫は許して下さい。」一郎は泣いて叫びました。

「歩け。」鞭が又鳴りましたので一郎は両腕であらん限り櫛夫をかばひました。かばひながら一郎はどこからか

「によらいじゆりやうぼん第十六。」といふやうな語ことばがかすかな風のやうに又匂にほひのやうに一郎に感じました。すると何だかまはりがほつと楽になつたやうに思つて

「によらいじゆりやうぼん。」と繰り返してつぶやいてみました。すると前の方を行く鬼が立ちどまって不思議さうに一郎をふりかへって見ました。列もとまりました。どう云ふわけか鞭の音も叫び声もやみました。しいんとなつてしまったのです。気がついて見るとそのうすくらい赤い瑪瑙めなうの野原のはづれがぼうつと黄金きんいろになつてその中を立派な大きな人がまつすぐにこつちへ歩いて来るのでした。どう云ふわけかみんなはほつとしたやうに思つたのです。

#### 四、光のすあし

その人の足は白く光って見えました。実にはやく実にまつすぐにこつちへ歩いて来るのでした。まつ白な足さきが二度ばかり光りもうその人は一郎の近くへ来てゐました。

一郎はまぶしいやうな気がして顔をあげられませんでした。その人ははだしでした。まるで貝殻のやうに白くひかる大きなすあしでした。くびすのところの肉はかゞやいて地面まで垂れてゐました。大きなまつ白なすあしだったので。けれどもその柔らかなすあしは鋭い鋭い瑪瑙めなうのかけらをふみ燃えあがる赤い火をふんで少しも傷つかず又灼やけませんでした。地面の棘とげさへ又折れませんでした。

「こはいことはないぞ。」かす微かに微かにわらひながらその人はみ

んなに云ひました。その大きな瞳ひとみは青い蓮はすのはなびらのやうにりとみんなを見ました。みんなはどう云ふわけともなく一度に手を合わせました。

「こはいことはない。おまへたちの罪はこの世界を包む大きな徳の力にくらべれば太陽の光とあざみの棘のさきの小さな露のやうなもんだ。なんにもこはいことはない。」

いつの間にかみんなはその人のまはりに環わになつて集つて居りました。さつきまであんなに恐ろしく見えた鬼どもがいまはみなすなほにその大きな手を合せ首を低く垂れてみんなのうしろに立つてゐたのです。

その人はしづかにみんなを見まはしました。

「みんなひどく傷を受けてゐる。それはおまへたちが自分で自分を傷つけたのだぞ。けれどもそれも何でもない、」その人は大きなまつ白な手でならを櫓夫の頭をなでました。櫓夫も一郎もその手のかすかにほほの花のにほひのするのを聞きました。そしてみんなのからだの傷はすっかり癒なほつてゐたのです。

一人の鬼がいきなり泣いてその人の前にひざまづきました。それから頭をけはしい瑪瑙の地面に垂れその光る足を一寸手ちよつとでいたゞきました。

その人は又微笑かに笑ひました。すると大きな黄金きんいろの光が円い輪になつてその人の頭のまはりにかゝりました。その人は云ひました。



「こゝは地面が剣でできてゐる。お前たちはそれで足やからだをやぶる。さうお前たちは思つてゐる、けれどもこの地面はまるつきり平らなのだ。さあご覧。」

その人は少しかぐんでそのまっ白な手で地面に一つ輪をかきました。みんなは眼を擦こすつたのです。又耳を疑うたががつたのです。今までの赤い瑪瑙の棘ででき暗い火の舌を吐いてゐたかなしい地面が今は平らな平らな波一つ立たないまっ青な湖水の面に変わりその湖水はどこまでつづくのかはては孔雀石くじゃくいしの色に何条もの美しい縞しまになり、その上には蜃氣楼しんきろうのやうにそしてもつとはつきりと沢山の立派な木や建物がじつと浮んでゐたのです。それらの建物はずうっと遠くにあつたのですけれども見上げるばかりに高く青や

白びかりの屋根を持つたり虹にじのやうないろの幡はたが垂れたり、一つの建物から一つの建物へ空中に真珠のやうに光る欄らんかん干のついた橋廊がかかったり高い塔はたくさんの鈴や飾り網を掛けそのさきの棒はまつすぐに高くそらに立ちました。それらの建物はしんとして音なくそびえその影は実にはつきりと水面に落ちたのです。

またたくさんの樹きが立つてゐました。それは全く宝石細工としか思はれませんでした。はんの木のやうなかたちでまつ青な樹もありました。楊やなぎに似た木で白金のやうな小さな実になつてゐるのつかり合つて微妙な音をたてるのでした。

それから空の方からはいろいろな楽器の音がさまざまのいろの

光のこなと一いっしょ所に微かすかに降くだつてくるのでした。もつともつと愕おどろいたことはあんまり立派な人たちのそこにもこゝにも一杯なことでした。ある人人は鳥のやうに空中を翔かけてみました。その銀いろの飾りのひもはまつすぐにうしろに引いて波一つたないのでした。すべて夏の明方のやうないにほひ、匂におひで一杯でした。ところが一郎は俄にはかに自分たちも又そのまつ青な平らな平らな湖水の上に立つてゐることに気がつきました。けれどもそれは湖水だったのでせうか。いゝえ、水ぢやなかつたのです。硬かたかつたのです。冷たかつたのです、なめらかだつたのです。それは実に青い宝石の板でした。板ぢやない、やっぱり地面でした。あんまりそれがなめらかで光あかりつてゐたので湖水のやうに見えたのです。

一郎はさつっきの人を見ました。その人はさつっきとは又まるで見  
ちがへるやうでした。立派なやうらく 璽やうらく 珞やうらく をかけ黄金きんの円光かぶを冠かぶりかす  
かに笑つてみんなのうしろに立つてゐました。そこに見えるどの  
人よりも立派でした。金と紅ルビー宝石ルビーを組んだやうな美しい花皿さきを捧さき  
げて天人たちが一郎たちの頭の上をすぎ大きな碧あをや黄金のはなび  
らを落して行きました。

そのはなびらはしづかにしづかにそらを沈んでまゐりました。

さつっきのうすくらい野原で一緒だった人たちはいまみな立派に  
變つてゐました。一郎は櫓夫を見ました。櫓夫がやはり黄金きんいろ  
のきものを着、やうらく 璽やうらく 珞やうらく も着けてゐたのです。それから自分を見ま  
した。一郎の足の傷や何かはすっかりなほつていまはまっ白に光

りその手はまばゆくいゝ匂にほひだったのです。

みんなはしばらくたゞよろこびの声をあげるばかりでしたがそのうちに一人の子が云ひました。

「此ここ処はまるでいゝんだなあ、向ふにあるのは博物館かしら。」

その巨おほきな光る人が微わら笑つて答へました。

「うむ。博物館もあるぞ。あらゆる世界のできごとがみんな集ま  
つてゐる。」

そこで子供らは俄にはかにいろいろなことを尋ね出しました。一人  
が云ひました。

「こゝには図書館もあるの。僕アンデルゼンのおはなしやなんか  
もつと読みたいなあ。」

一人が云ひました。

「こゝの運動場なら何でも出来るなあ、ボールだつて投げたつてきつとどこまでも行くんだ。」

非常に小さな子は云ひました。

「僕はチョコレートがほしいなあ。」

その巨きな人はしづかに答へました。

「本はこゝにはいくらでもある。一冊の本の中に小さな本がたくさんはひつてゐるやうなものもある。小さな小さな形の本にあらゆる本のみな入つてゐるやうな本もある、お前たちはよく読むがいゝ。運動場もある、そこでかけることを習ふものは火の中でも行くことができる。チョコレートのもある。こゝのチョコレートは

大へんにいゝのだ。あげよう。」その大きな人は一寸空ちよつとの方を見ました。一人の天人が黄いろな三角を組みたてた模様のついた立派な鉢を捧げてまつすぐに下りて参りました。そして青い地面に降りて度うやうやしくその大きな人の前にひざまづき鉢を捧げました。「さあたべてごらん。」その大きな人は一つを櫓夫にやりながらみんなに云ひました。みんなはいつか一つづつその立派な菓子を持つてゐたのです。それは一寸嘗なめたときからだ中すうつと涼しくなりました。舌のさきで青い蛍のやうな色や橙だいたいいろの火やらきれいな花の図案になつてチラチラ見えるのでした。たべてしまつたときからだがピンとなりました。しばらくたつてからだ中から何とも云へないいゝ匂いがぼうつと立つのでした。

「僕たちのお母さんはどつちに居るだらう。」櫛夫が俄にはかに思ひだしたやうに一郎にたづねました。

するとその大きな人がこつちを振り向いてやさしく櫛夫の頭をなでながら云ひました。

「今にお前の前のお母さんを見せてあげよう。お前はもうこゝで学校に入らなければならぬ。それからお前はしばらく兄さんと別れなければならぬ。兄さんはもう一度お母さんの所へ帰るんだから。」

その人は一郎に云ひました。

「お前は今一度あのもとの世界に帰るのだ。お前はすなほないゝ子供だ。よくあの棘とげの野原で弟を棄すてなかつた。あの時やぶれた



お前の足はいまはもうはだしで悪い劍の林に行くことができるぞ。今の心持を決して離れるな。お前の国にはこゝから沢山の人たちが行つてゐる。よく探<sup>さが</sup>してほんたうの道を習へ。」その人は一郎の頭を撫<sup>な</sup>でました。一郎はたゞ手を合せ眼を伏せて立つてゐたのです。それから一郎は空の方で力一杯に歌つてゐるいゝ声の歌を聞きました。その歌の声はだんだん変りすべての景色はぼうつと霧の中のやうに遠くなりました。たゞその霧の向ふに一本の木が白くかゞやいて立ち櫓夫がまるで光つて立派になつて立ちながら何か云ひたさうにかすかにわらつてこつちへ一寸手を延ばしたのです。

## 五、峠

「櫓夫」と一郎は叫んだと思ひましたら俄かに新しいまつ白なものを見ました。それは雪でした。それから青空がまばゆく一郎の上にかかつてゐるのを見ました。

「息吐だぞ。眼開いだぞ。」一郎のとなりの家の赤髯の人がすぐ一郎の頭のとこに曲んでゐてしきりに一郎を起さうとしてゐたのです。そして一郎ははつきり眼を開きました。櫓夫を堅く抱いて雪に埋まつてゐたのです。まばゆい青ぞらに村の人たちの顔や赤い毛布や黒の外ぐわいたう套たうがくつきりと浮んで一郎を見下してゐるのです。

「弟あなぢよだ。弟あ。」犬の毛皮を着た獵師が高く叫びました。となりの人は櫓夫の腕をつかんで見ました。一郎も見ました。

「弟あわがないよだ。早く火焚げ」となりの人が叫びました。

「火焚いでわがない。雪さ寝せろ。寝せろ。」

獵師が叫びました。一郎は扶たすけられて起されながらも一度櫓夫の顔を見ました。その顔は苹果りんごのやうに赤くその唇はさつき光の国で一郎と別れたときのまゝ、かすかに笑つてゐたのです。けれどもその眼はとちその息は絶えそしてその手や胸は氷のやうに冷えてしまつてゐたのです。



# 青空文庫情報

底本：「宮沢賢治全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年3月25日第1刷発行

1992（平成4）年3月10日第6刷発行

入力：あきしら

校正：伊藤時也

2000年2月4日公開

2005年10月18日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# ひかりの素足

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>